

瞎道本光『室内聯灯秘訣』の研究

菅原研州

一、はじめに

本論は、江戸時代の曹洞宗の学僧・瞎道本光（一七一〇～一七七三、指月慧印「一六八九～一七六四」の資）の著作である『室内聯灯秘訣』の検討を通して、瞎道によって示された室内作法の研究を行うものである。

二、『室内聯灯秘訣』解題

『室内聯灯秘訣』であるが、先行研究^{〔1〕}によれば、宝暦三年（一七五三）、瞎道四三歳の時に『室内聯灯秘訣』を述し、その翌年に埼玉皎心寺に寄寓して同書を繕写、更に同年に埼玉広福寺の授戒会を修行した後で、向陽庵にて『禅

瞎道本光『室内聯灯秘訣』の研究（菅原）

戒口訣或問』の草稿を著し、これらを合わせて『聯灯秘訣集』にしたとされる。

今回の研究では、愛知学院大学図書館蔵・同禅研究所配架の江戸期写本（具体的な写本時期は不明なるも、紙質・筆致などから江戸中期頃と判断）によって研究を行う。当写本は二冊本であり、内外の題はそれぞれ以下の通りとなっている。

一冊目外題 『聯燈秘訣集 乾之初部』

内題 『室内聯燈秘訣』

二冊目外題 『禪戒口訣集 乾之後部』

内題 『禪戒口訣或問』

以上から、当写本は先行研究の指摘とは異なり、『聯灯

瞎道本光『室内聯灯秘訣』の研究（菅原）

秘訣集』と『禪戒口訣集』という二部から構成されていて、統合する題はないと見るべきである。更に、この二冊はそれぞれ「乾之初部・後部」となっており、当然に「坤」に該当する部分があるはずだが、本学図書館には所蔵されていないため、詳細は不明である。

なお、本論では一冊目の『室内聯灯秘訣』の研究を行い、『禪戒口訣或問』は別の機会に成果を発表する予定である。

『聯灯秘訣集 乾之初部』は以下の構成となっている。項目の題があるときはそれを用い、ない場合には筆者が便宜的に付し、書体を変えて差異を表現した。

・聯灯秘訣集題辭

・室内聯灯秘訣（本文）

洒水 豎繼 横繼 嬰兒行 祥鷄（未考典拠）

續松 秘書 勃陀勃地 合血

入室之夜合血了畢（※伝法式口訣も含む）

『三物』書式参究 吉祥高祖之嗣

原文ママ

問勃駄勃地（※三物に関する口訣も含む） 烏八旧

・跋（本光叟自跋）

以上から、本書は宗門の伝法作法である『伝法室内式（以下「作法書」と略記）』の口訣集であることが分かる。

「作法書」には本文中に「口訣有り」などの註記が複数存在し、つまり、各法系室中における「口訣」によって補充されることで、初めて形式・内容ともに揃うものである。

従来、万仞道坦（一六九八〜一七七五）の『室内三物秘弁（以下『三物秘弁』と略記）』（宝暦年間「一七五一〜一七六四」成立）、面山瑞方（一六八三〜一七六九）の『伝法室内密示聞記（以下『密示聞記』と略記）』（享保一五年「一七三〇」より後に成立）（両著ともに『曹全』「室中」巻所収）が、口訣を明文化したのものとして知られていたが、今回の研究を通して更に瞎道が伝えた口訣も加わることになった。

面山は、『密示聞記』にて明峰下の口訣を批判し、峨山派（具体的には太源派）の口訣を重視すべきことを主張しているが、本書もまた瞎道の法系からすれば峨山派（具体的には通幻派の天真自性系）になるといえる。

三、瞎道の執筆態度について

瞎道による本書成立の経緯を考察したい。

去シ癸酉冬信順ノ具壽三四輩、本山ニ聚會。有ル夜間更深夜同歩同運シテ予カ之面前ニ来テ〔中略〕三拜シ位ニ依テ而立ツ。曲躬叉手シテ又合掌シ密ニ予ニ語テ曰ク、我等先ニ某師ノ室ニ入ルト雖ドモ、儀軌口訣等實ニ未穩在ン。此開戒會中、諸師我等ノ為、密懷ヲ開テ而戒儀并室内ノ口訣、一物遺サズシテ示誨セヨ。³⁾

このようにあつて、癸酉（宝暦三年「一七五三」）の冬安居の時であるが、本山（具体的な場所は不明）での授戒會に合わせて、各地より随喜した僧侶の中に、室内の儀軌に自信が無い者がいて、その者達の求めに応じて瞎道が説いた室内儀規であつたことが分かる。なお、既に前項で採り上げたように、本書は翌年（宝暦四年）春（本書奥書から、二月一八日と判断できる）に推敲の上、『禪戒口訣或問』と合冊されて後代に伝わつたようである。また、本書によれば瞎道の密授を書き記した僧がいたようで、その者は書写記録を渡しながら瞎道に考訂してくれるように望

瞎道本光『室内聯灯秘訣』の研究（菅原）

んだ。つまり、現在伝わる本書は、瞎道本人の考訂が及んだ内容であり、瞎道が伝えた室内儀規を良く表している判断すべきである。

四、『室内聯灯秘訣』各項目について

以下は本書本文の各項目について見ていきたい。その際、『三物秘弁』『密示聞記』等と対応する箇所があれば、その比較を行いながら、本書の特徴を際立たせたいと思つている。

①洒水

洒水の項目の冒頭、「法は戒儀の如し」とある。これは、永平道元が将来された『仏祖正伝菩薩戒作法（以下『菩薩戒作法』と略記）』のように洒水を行うことを意味している。『菩薩戒作法』には、「順逆洒水」と「四方洒水」と二つの作法があるが、冒頭では道場の結界が目的であるため、「順逆洒水」のことを指している。なお、『菩薩戒作法』では教授師が行うように指示されているが、本書では「師資随逐」とあつて、師が洒水しその後を弟子が就いて

いくことになる。

なお、洒水は伝法道場に弟子が入ってくることで始まるが、その際、「但シ聯燈之夜、資諸堂行香了、將ニ室ニ入ント之時、師、逆迎シテ而灌頂受職セル。是レ之ヲ師ハ裏頭自リ弟子ヲ見、資ハ頂頼自リ師父ヲ拜スト謂⁴」という口訣があり、つまり幕が張られた伝法道場に入ろうとする弟子を師の側が迎（逆迎）え、にわか灌頂することをいうが、それを『正法眼蔵』「面授」巻の一節「一言いまだ領覽せず、半句いまだ不会せずといふとも、師、すでに裏頭より弟子をみ、弟子、すでに頂頼より師を拜しきたれるは、正伝の面授なり⁵」をもつて解釈している点が特徴的だといえる。

当該の一節は、卍山道白（一六三六〜一七一五）が『洞門衣柳集』の問答「第六件」⁶において未悟嗣法の典拠として採り上げて以来、天桂伝尊（一六四八〜一七三五）などからの反論を呼ぶなどした。しかし、瞎道は当該の一節を儀礼に導入することで、道元が同巻で示そうとした本旨を、卍山等による悟未悟の議論の外側に置いて回復させたと指摘できよう。なお、瞎道の主著である『正法眼蔵却退

一字参』「面授」巻では、当該の一節を室内の作法と関連させて論じた形跡はない。また、『密示聞記』でもこの一節を引くが、それは面授の意義を強調するためであり、本書のように伝法作法と関連させているとはいえない。

② 豎継

作法書では「奇拜」とも呼ばれる礼拝法であるが、本書本項においてはその名称は用いられず、師が立つ東、弟子が立つ西の双方に意義があり、また、坐具の敷き方の問題で、面授における師資の次第を明らかにする礼拝だと指摘している。そして、「入室之夜合血了畢」項に、再度「豎継」のことが採り上げられ、ここでは「奇拜」の名称を挙げつつ礼拝作法について指摘がされている。

なお、本項の特徴としては、豎継の意義を「應ニ師資面授ノ次第分明觀面ナルコトヲ忘レザルベシ」とし、また、「之ヲ豎ニ三世ニ徹スル之端的ト謂也。故ニ修證即無ト⁷」とされ、修証觀に還元して捉え直していることも指摘できよう。

③横繼

作法書では「超宗越格拝」とも呼ばれる礼拝法であるが、本書でもその名称について指摘し、その意義としては、師資が東西に並立して北面に三拝することと、師資が左右から同時に進前して焼香することを示している。

前者を「師東資西ナル者、不次之次、而モ竝ヒ立テ面北スル者、父子同ジク不傳之上位ニ入ルコト之機軸而已也⁸⁾」として、師資の一体なる境涯とし、面を北にして礼拝する意義としては、北が如来涅槃大寂靜の地であることを示すから、その「不傳之上位」に、師資ともに向かう作法において師資一体で無差別を示すという。

後者は「同時焼香ハ則師資ノ身心不染汚也⁹⁾」とあって、無分別になされる焼香により、師資お互いの身心が不染汚であることを示す。不染汚の修証をよく表現した作法であるといえる。

④嬰兒行

作法書では「膝行七歩」とも呼ばれる作法であるが、師より『嗣書』を受ける資が、膝立ちで資の下まで向かう歩

晴道本光『室内聯灯秘訣』の研究(菅原)

き方を指す。そこで、本書では『宝鏡三昧』における「五相完具の如来児」として解釈しているが、面山『密示聞記』では「五相完具の如来児」の典拠になる『大般涅槃經』「嬰兒行品」にのみ言及しているため、その点で明らかに相違している。なお、本書では当作法の意義については、受者である資が「五相完具の如来児」として自ら「瞿曇」になることだと解釈している。そして、当作法では、師の下に就いた資の袈裟角を取るが、これについては瞿曇のものになった資の袈裟を返すことで、今度は俗名に戻ったことを意味するという。実際、作法書では、『嗣書』の授与と磨頂の儀が終わってから六歩戻り、袈裟を直すことになっている。この一連の動作からは、如来の境涯に安住せずに、衆生教化に邁進するように促す目的があるといえる。

なお、「入室之夜合血了畢」項では、嬰兒行について再度詳細な問答が記載され、「膝行七歩」「磨頂」などの意義を掘り下げ、前者は「七」という数字にこだわり、「七仏」「周行七歩」「七財」などに共通するものだとして衆生を超越した仏としての作法の特徴を強調した。後者につい

賤道本光『室内聯灯秘訣』の研究（菅原）

ては「師、資ノ頂ヲ磨スル、之ヲ囑累慰諭ト謂¹⁰」としているが、『妙法蓮華経』『囑累品』などで磨頂の儀が見えることを受けての内容だといえよう。

⑤ 祥鶏〈未考典拠〉

作法書では「二頭祥鶏点火燭」と呼ばれる作法である。本書では割注で「未考典拠」とはしているが、洞門室内に所伝される『空塵書』の名前を挙げて、同書中に分明であるとしている。実際に、『空塵書』はこの一句を採り上げ註釈するものである¹¹。

そこで、作法としては師と資とでともに松燭を持ち、『嗣書』の名字を照らすものであるが、作法の解釈は「⑥ 續松」に詳細が記載され、本項では二頭の祥鶏が、師資を示すものであり、また、資が迷悟何れの段階においても、師の「啄」によってともに目覚めていくことを指すという。いわば、文字通りの無師独悟を否定し、「面授の意義を説く文脈であるといえよう。

⑥ 續松

續松の語について、「若シ續カズンハ燭火微ニタラン¹²」とし、伝灯の重要性を説くものであるが、この作法で行う『嗣書』の名字を照らすことについては、名字とは「摩訶般若波羅蜜」であり「佛母法母一切賢聖母生母」と三宝に与つての母であるとし、「纔ニ名字ヲ知レハ則、佛性明見ノ端的底時也¹³」とした。いわば、受者本人が、自らが何故に仏性を得て祖師位に登ったかをよく自覚させ、その本源を示すことが、名字を照らす作法の意義だといえる。

⑦ 秘書

秘書について、『三物秘弁』では古来『参同契』『宝鏡三昧』『五位顕訣』を授けたが、中古以来「大事図」になつたとしている。一方『密示聞記』では「世ニ斷紙ト云物アリ」として、室中で伝授される「切紙」があるとしながらも、その批判をしている。本書では面山の見解に共通し「秘書トハ或説ニ寸片紙ト云ハ非也¹⁴」とし、切紙ではないとしている。その上で、仏祖の伝灯とは、「竺土大仙心東西密相付」（『参同契』）として相伝された瞿曇の正脈その

ものであり、「佛祖單傳之不立文字底一齊ニ秘書ト称ス。舌頭路絶シ了レリ」とした。つまり、切紙の価値に重きを置かずに、むしろ、一切の文字・言句が絶したところこそ、「秘書」があるとするのである。『密示聞記』では面山自身が自ら切紙を作り直したことに言及し、『洞上室内訓訣』（『曹全』「室中」所収）は面山による口訣集として知られるが、その立場とは相違すると言つて良い。だが、後段の問答では、「寸片紙」への言及や引用も見えるため、「寸片紙（切紙・断紙）」が原理的に否定されたのか否かは、慎重な判断を要する。

⑧ 勃陀勃地

本書ではこの語について、「此ハ佛語也」とし、「翻訳家之手ニ落テ、文ニ句ニ此義ヲ宣ヘ明シ矣」としているが、具体的な意義については簡単に「佛陀菩提全ク一字ノ轉也¹⁶」とするのみで、本項では思想的に深めてはいない。しかし、「問勃駄勃地」項にて、或る問者に答える形で再論しているため、本論でも後に詳述する。

晴道本光『室内聯灯秘訣』の研究（菅原）

⑨ 合血

「合血」とは道元『正法眼蔵』「嗣書」巻にて、洞下の嗣書を記す際の作法として提示されたものであるが、本書でもその意を受けているため、まず「寸片紙之説者、是非半ハ也¹⁷」と切紙で相伝された「合血」の説へ疑義を呈し、「嗣書」巻を採り上げ、日月星辰を明らかにして嗣法されるとき、必ず『嗣書』があることを指摘する。その時、合血の儀もあるが、本書では「指血舌血者、資ハ輪相ヲ書シ、自己之名ヲ闕テ、之ヲ書セズ、師之ヲ書ス。證契即通ハ師親筆也。此レ則チ合血也¹⁸」とした。つまり、『嗣書』を書く際に、師と資とで書く部分の分担が正しく行われることを「合血」だとした。なお、『正法眼蔵却退一字参』「嗣書」巻には、この「合血」の解釈は見えない。

そして、特に批判された説は、「錯テ合字形ヲ認、師資ノ血、是如ニ合成スル之會ヲ作コト莫。此ハ表信而已²⁰」とした。つまり、切紙や『嗣書』を疊んだ際に書く「合」字形でもなければ、本当に血液を合わせるようにして行う儀式を指すのも誤りだとしているのである。その理由としては、「最初入室之時、灌頂受職ス。豈血脈流通セザラン乎²¹」

とあって、師資の血脈はこの伝法道場に入室したときに既に行われていることだとしており、いわば、それ以降の作法は全て、血脈が通じた上での修行だといえる。資が道場へ入室する際の作法を、「面授」巻の一節を引いて意義付けているため、本証妙修的に解釈しようとする意図を感じることができる。


⑩入室之夜合血了畢

本項以降は、伝法作法の詳細な口訣について論じており、以前の項目と重複している箇所も多いが、特に採り上げておくべき事柄は、「合血了畢」後において、師は資に対し蜜湯を飲ませるべきだとしていることである。それは、「佛法僧寶不思議之珍味、比況スルニ未ダ足りズ及バズト雖モ、而モ飲ミ了テ自知スルコト」とあって、もし資が未だに得ざることがあったとしても、三宝不思議の蜜湯を飲ませることで、妙味たる真実を知らしめる目的があるという。敢えて「佗室ニハ此湯無力⁽²²⁾」として、自派の特徴だと示している。

なお、瞎道が付したものは不明だが、本書本項頭注で

は、「蜜湯」は「醍醐」であるとしている。つまり、最も得難い仏法の真実だと解釈しており、それを師から飲ませて貰うことで、資の内に仏法の真実を獲得させる意図もあると理解できよう。

⑪『三物』書式参究

本書一〇丁裏より、『三物』の書式に関する参究に入っていくのだが、その経緯としては、作法書内に見える礼拝の数は、かなり独特である。特に、師資間で室内伝授物を遣り取りする場合の拝数は容易に理解が及ばない。本書では礼拝数について指摘する中で、畢竟は「師資同、奇特之一拜ニ帰スル而已、箇ノ一拜ニ表スル也。師資同萬法歸一之出相中ニ入ルコトヲ⁽²³⁾」とあって、脈絡は不明だが、『大事図』の円相(出相)の話になり、以下、同図の各円相についての解釈が進む。なお、各円相は、「十方己心唯心寂光三界淨土等ト曰フ。箇ノ裡之己心唯心ハ同體異名乎」とあって、心に種々相があつて、しかも各々は同體異名であることをいう。まず、且ク己心淨土也」とあって、自己の心がそのまま淨土であるとす。以下、一〇且ク唯心

浄土也」とあり、単純な一円相は唯心がそのまま浄土であることを示し、「二ツノ圓相也。究竟ナル者、寂光妙土也」とあって、二重の円相は寂光妙土であるという。しかし、「寂光妙土娑婆界ト曰フ。寂光土ハ則且ク●(昆命)裡許也²⁴」とあって、寂光妙土は無分別であるから、娑婆界になつていき、黒円相で示すように、この浄土と娑婆界(三界)とが、回互不回互に交参するところに、如来出世の一大事因縁の本道場としての三界があるという。既に、「嬰兒行」の項で紹介した、瞿曇から俗名へと戻るといふ流れそのものを、『大事図』の各円相に当て嵌めていえる。これは、生仏二項の間で解釈する『三物秘弁』とも、正偏五位説で解釈する『密示聞記』の態度とも異なつている。

問、方圓頂上○者。

瞿道本光『室内聯灯秘訣』の研究(菅原)

答、當ニ受戒口訣中ニ述スベシ。而レドモ今ニ之ヲ畧述セン。夫、新受戒ノ面孔、蓮臺上ニ開ク。故、天上人間稱獨尊ト曰フ。更ニ還リ歸テ○頂上ニ入ル者、佛祖已前血脈ヲ通ス。故ニ○ノ下ニ於、本師佛ト書ス。²⁵

この問答は、『血脈』の図で、釈尊の上にある円相の意義について説いたものである。『血脈』を「戒脈」であると言い換えている瞿道は、本来は「受戒口訣中」にて述べるべきところを、敢えて『三物』に因んで、本書本項にて述べている。なお、本書に続く『禪戒口訣或問』でも「受戒と伝戒の問題」を論じる中で、本書同様の『血脈』書式についての指摘があるため、瞿道が「受戒口訣中」と述べるのは同書を意味している。なお、「舊来寸片紙ノ中、指南車ヲ転ス、往テ御焉²⁶」とあり、『血脈』に関する切紙について、「旧来の指南車」とし、それについては「御」するように説いているため、批判していることが分かる。『嗣書』についてだが、以下の問答から解釈が進む。

問、法脈之中、四七名字、翻不翻有者。

答、且ク吾吉祥高祖之嗣辰真讀(原文ママだが、頭

注に「讀当作蹟」とあつて、それが正しい)ヲ拜シテ而須其ノ疑情ヲ止ムベシ。其畧シテ圖様之文寫ス。

今、後二記ス。汗ニ触ル勿焉。⁽²⁸⁾

『法脈』が『嗣書』のことだが、「四七名字」とあるため西天二八祖の名前について、翻訳された者とされておらず、者があつたのは何故かと聞いていることになる。瞎道の答えは、「吉祥高祖之嗣書」を拝読して、自分の疑問を止めるべきだと促している。

⑫吉祥高祖之嗣書(原文は「嗣」のみ、誤写か)

瞎道が『嗣書』参究の基準として提示したのが、「吉祥高祖之嗣書」である。これは、現在永平寺にて収蔵される永平道元将来とされる『嗣書』であると思われる。

まず、瞎道は前項で示した通り、『法脈(嗣書)』に書かれる祖師名について注目し、「婆須密多」「馬鳴尊者」「龍樹和尚」「獅子尊者」「二祖大師」について、道元『嗣書』の記名法を示している。転じていえば、それ程に道元『嗣書』の記述は異例な場合が多いといえ、特に「馬鳴尊者」を示すと思われる「阿那菩提」は漢訳文献に同名が見えな

いという特異な記述である。なお、筆者の管見では、江戸元禄期までに書かれた『嗣書』を見る限り、多く馬鳴は馬鳴(具体的には馬鳴勃陀勃地)と書かれるものである。また、面山が開いた永福庵(現・福井県小浜市)に収蔵される面山『嗣書』(損翁宗益より伝付)と、面山が資・衡田祖量に伝付した『嗣書』は、ともに馬鳴を「虞羅毘尼勃陀勃地」と記述し、こちらも特異な記述である。このように、「馬鳴」をどのように記載するかは、『嗣書』書式研究の上で最大の課題の一つであるが、現状「阿那菩提」が一般的になったのは、江戸期以降の道元『嗣書』研究の結果といえる。無論、その是非については慎重に検討されるべきで、道元『正法眼蔵』「仏祖」巻、瑩山紹瑾『伝光録』「第二祖」章もともに「馬鳴」と示される事実からすれば、「阿那菩提」と書かれた道元『嗣書』の出所について、批判的に考察する必要がある。

また、本書では更に、『嗣書』の地絹、縦横の長さ、中心の祖師方の名前が記された円相の紹介(併せて円相内の名前を書いた人を推定)、下段文(併せて押印の配置も紹介)、中心の釈迦牟尼勃陀勃地についての指摘などを挙げ

ており、その記載は永平寺所蔵の『嗣書』と一致する。

その上で注意したいのが、瞎道は自分が拝覧した道元『嗣書』の書式等を記した後で、「右圓満覺性禪師之親繕寫也²⁹⁾」と記していることである。「円満覺性禪師」とは永平寺四一世・義晃雄禪（一六七一〜一七四〇）のことであり、永平寺へは元文元年（一七三六）から遷化する時まで住持の位にあった人である。

そこで、道元『嗣書』に関する所見を記しておきたい。

従来よく知られたこととして、道元の古伝には、道元が伝えたとされる『嗣書』そのものについての記載が無い。例えば、一三〇〇年ごろ提唱の瑩山『伝光録』「第五一祖」章では、『正法眼蔵』『嗣書』巻から引用され、道元が中国で拝覧した『嗣書』の様子を伝えるが、「嗣書」巻同様に道元将来の『嗣書』そのものについては何も書かれていない。その後、永平寺一四世・建撕（一四一五〜一四七四）が永平寺所蔵の文書を用いて編集した『永平開山行状（通称・建撕記）』でも、道元『嗣書』への言及は無い。しかし、江戸時代に入ると、急激に道元『嗣書』に関する記述が増えてくる。

瞎道本光『室内聯灯秘訣』の研究（菅原）

・享保年中、三州龍源萬光和尚、永平寺に安居し、特願して高祖嗣書を拝見書写し来たり、余に示す。

『三物秘弁』³⁰⁾

・師四十八歳、二月末例に依りて越の祖山に上り、進山の儀を伸ぶ。因みに天童の永平に授くる所の嗣書を拝覽することを請う。乃ち「法脈贊」を述して、時に玄洞知事に託し、法脈を供養するの齋を設く。

『永福面山和尚年譜』「享保十五年庚戌」³¹⁾

このように、永平寺が所蔵し公開された道元『嗣書』に關しては、「享保年間」という年代が出てくるのである。それ以前には關連する記述が見当たらず、この時代以降に増えるというのは、当時の住持であった三九世・承天則地（一六五五〜一七四四、享保元年〜一四年まで住持）か四〇世・大虚喝玄（一六六一〜一七三六、享保一四年以降住持）の頃に、道元『嗣書』について何かしらの手当てが行われた可能性を示唆している。そして、本書で道元『嗣書』書式を記した後に「親繕写」したと指摘される義晃雄禪は、大虚の次の住持であるから、この頃に永平寺の室中文書を整備する事情でもあったのだろう。

「面山は『密示聞記』で、義晃雄禅に永平寺で謁参した際に拝覧した、道元―懐奘間で伝授された『大事』について指摘している。面山自身は、自ら著した『訂補建撕記』にそのことを載せたかったようだが、義晃から許可が下りなかったという³²⁾。この道元―懐奘間の『大事』も、従来見られない文書であり詳細は不明だが、果たして真実にそのようなものが道元の時代に存在したのか否か。面山は道元真筆だと断定しているが、実物が無い以上、何とも判断ができない。

また、本書では瞎道が、道元『嗣書』を見ることができた理由として、以下の一節を挙げています。

右三州宝飯郡萩村虎嶽山龍源寺現住宝園灵梵長老之ヲ寫シ而吾門派之長老等ヲシテ吉祥室中之古蹟ヲ知ラシム。彼師者、予舊友也。³³⁾

この経緯からすれば、宝園靈樹が道元『嗣書』を入手し、それを写して同派の長老達に配布したということなのだろう。なお、先に挙げた『三物秘弁』に見える萬光道輝と宝園は同じ三河龍源寺の住持（萬光が一三世、宝園が一四世）であり、よって、宝園が入手したのも萬光書写の

『嗣書』であった可能性もある。そうなると、不明となるのが義晃雄禅の「親繕写」の位置付けなのだが、ここでは義晃書写の『嗣書』そのものか、「書式に関する書き付け」が流布していた可能性のみ指摘しておきたい。

⑬問勃駄勃地

「勃陀勃地（勃駄勃地）」の意義について質問された瞎道は、同語について詳細に答えている。質問された経緯については、『嗣書』書式参究の上で欠かせない同語について、その意義を質しておきたいということなのであろう。

瞎道からの回答は主として二点となっている。

一つは、「勃陀勃地」を梵字にまで還元し、その上で中国における訳語の問題を取り扱うことである。また、その際に梵字に対してなされた密教的解釈（円伊の三点など）を付しながら、「禅門戒壇」に登壇することにより、「勃陀勃地」の意義を、自ら体得するべきであると述べた。そして、「勃陀ハ唯佛ニシテ而師面孔也。勃地ハ與佛ニシテ而資皮肉」としてその一体なる様子を説いたのである。

もう一つは、道元『嗣書』は、道元の名のみ「新道元」

として「勃陀勃地」を付けないが、その意義についての指摘がされている。

而、位々同ク勃駄勃地ト稱ス。唯獨リ新戒ノミ稱セザルハ佗ノ故無シ、新戒ト稱スル故而已。宗門之戒脈者正法眼藏也。故戒律ヲ先ト為スト曰フ。四七二三ノ祖師旧ヨリ来カタ如上之佛戒ヲ受持ス。當ニ知ルベシ、受持之戒法者、命脈一尖也³⁴ト。

宗門の仏戒を正式に受け嗣いだばかりの「新戒」だからこそ、「新〇〇」とし「勃陀勃地」を付けないと、瞎道は主張しているのである。なお、面山は能登酒見龍護寺にて当時から三〇〇年前の『嗣書』を拝覽したとし、その際には受者の名前について「〇〇勃陀勃地」とあつたとしたが、これは如浄―道元間で授与されたという『嗣書』と書式が合っていないとする（『密示聞記』³⁵）。しかし、それは永平寺による道元『嗣書』の公開・流布以前の多様な書式を物語っており、むしろ宗門『嗣書』成立史の観点からは見逃せない指摘といえる。また、瞎道は新戒として本師より戒脈を受けるときの問答を記載している。

又ハ正中妙挾正明不露ト曰者裡、還、是如ノ不可思

瞎道本光『室内聯灯秘訣』の研究（菅原）

議ノ面孔ヲ具スル底有麼。

高聲ニ喝シテ云ン、新戒本光ト。³⁶

これは、『宝鏡三昧』の一節を採り上げ、言葉や思念の及ばない「面孔（本来の面目）」を、資（受者）が具えているかどうかを尋ねるものである。そして、師の問いに対しては、高声に喝して「新戒〇〇（受者自身の名）」と答えるべきだとしている。この時、不可思議の面孔が、思慮を絶して師の前に提示されるのである。

本書の特徴として、瞎道の本師である指月慧印に対しての言及が無いことに留意されるのだが、この短い一節に、瞎道自身が経験したであろう師資の親しい遣り取りを見ることが出来る。

⑭ 烏八旧（白）

「烏八旧（白）」とは、墓石や塔婆に書かれた文字である「鵠（鵠）」のことを指す。同字を解字して「烏八旧（白）」という。宗門で伝授された切紙に「鵠（鵠）字」があり、その消息が知られているが、同切紙では「古左傳曰、鳥是三界唯一心、台ハ三世不可得也³⁷」と示すのみで、内容は知ら

れない。その点、瞎道の提唱は極めて詳細である。

まず、質問された経緯だが、「吾門舊来ヨリ塔婆ノ頂顛ニ一箇之字ヲ扨シテ而諸ヲ烏ハ白ト讀ミ、因縁ヲ附シテ婆羅門具縛之事ト為。請フ、之ヲ説ケ」とある。こちらも前項の「勃陀勃地」同様に、意味が難解であったために問者が尋ねたと思われる。

そこで、瞎道は「爾ノ縁、未ダ之ヲ見ザル、而ニ具縛者、具煩惱者之總名也」とし、伝えられた縁起については深い関心を示さず、また、或る人から聴いたこととして、室内の寸片紙の中に「鶴字」があるとはするが、「之ヲ疑フコト尚シ」とした。更に愚かな者は『大随求陀羅尼經』の中に似たような「鶴」字を見出したり、寸片紙では「鶴」字を「烏八旧」と三字に分けてしまっているが、ともに誤りであるとした。特に、前者の「鶴」字については、陀羅尼本来の梵字の意義にまで戻り、従来瞎道が聞いていた諸説を出して、各説は大いに混乱しているとした。また、この問者が述べた「具縛婆羅門」の説については「牽合附會ノ説」とし、問者に対し「真説ヲ檢セヨ」と更なる参究を促したのであった。瞎道の答えを総合すれば、

塔婆・墓石などの上部に「鶴」字を書くこと自体を否定しているようである。

そこで、問者は更に、「塔婆ノ頂顛ニ種々之形色ヲ畫ス、什麼ノ模様ゾ。請師、予ガ為ニ之ヲ説ケ」と尋ねた。

瞎道の返答は、「爾ク往々焉ヲ看ル、功德聚ノ頂顛ニ **ㄩ** **ㄩ** **ㄩ** 等之種々ノ梵形ヲ畫シテ、而自ラ **ㄩ** 伊字ノ三點ナルコトヲ知ラズ」とし、諸説はいたずらに余計な解釈を付しているが、「上來種々ノ邪解、又佗無シ、梵字ヲ知ラザルガ之致所也」と批判した。ここからは、瞎道本人は梵字についてかなりの自信を持つほどに習字していたことが伺える。

そして、塔婆の上部に書くべき文字について、「正義」を説いてくれることを更に願った問者に対し、瞎道は旧師からの伝承として、「**ㄩ** 伊字」を書くべきとし、具体的には「**ㄩ** 字ヲ扨シテ佛法僧一體三宝之文字ヲ扨シテ自ラ純黒ノ形ヲ成ス」べきだとしたのである。理由としては、その「純黒」の中に、種々の色形を具するためであり、亡き人を用う塔婆に功德の聚を示したいのであれば、その道理を正しく表現するべきだとしたのである。

以上から、いたずらに形式にとらわれず、誤伝にもとらわれず、真実を行うべきことを説こうとした瞎道の教育者の態度が良く見える問答であったといえる。

なお、この答えを聞き、「問ノ具壽、焼香三拜而退ク」とあり、納得して退いた様子が記録されている。

五、結論

本論では、瞎道本光著『室内聯灯秘訣』の検討を通して、瞎道が伝えた室内の作法や口伝について検討した。従来、『伝法室内式』の口訣については、万仞『三物秘弁』が特に用いられ、一部に面山『密示聞記』が参照されていたが、本研究を通して、瞎道によって示された本書もまた、参究されるべき内容であることを示した。

そこで、本書の特徴を示せば、瞎道は室内の口訣を示すに及び、「寸片紙（切紙・断紙）」の見解を批判した。また、部分的には永平道元『正法眼蔵』の見解を依用して、室内の儀軌を道元の説いた宗旨によって解釈しようとした。ここからは、瞎道もまた、宗学復古に尽力した祖師である位置付けられる。

瞎道本光『室内聯灯秘訣』の研究（菅原）

また、「勃陀勃地」「烏八旧（白）」など、一見して理解し難い用語については、「寸片紙」を批判しつつ、典拠となる経文・陀羅尼に当たって正義を示し、特に陀羅尼については、本来の梵字に翻訳して提唱した。そこには、瞎道自身の梵字への広い習字が基本にあると見るべきである。

その意味では、面山瑞方も同様の手法で室内の儀軌や意義を再構築しようとしたため、同じ立場に立つと見て良い。しかし、「室内三物」については、面山は瞎道よりも更に多くの資料を拝覧・渉獵しており、特に「峨山派の口訣」を強調するべく、面山が見聞した資料や口訣を、その提供した当人の名前や法系を挙げて示し、伝統的に遡及することで、自らの見解の根拠を補強している。瞎道は、伝統への遡及について、ほとんど配慮が見られないといっている。

また、面山も瞎道とともに、自身の本師からの口訣を示すという態度は採っていない。それは、室内に関する自身の発言は当然に本師からの伝承だという自明さの故なのか、本師からの伝承ではなく自身が各地で参学して得た口訣であるからなのか、容易に判断は付かない。面山の本

瞎道本光『室内聯灯秘訣』の研究(菅原)

師・損翁宗益(一六四九〜一七〇五)も、瞎道の本師・指月慧印もともに宗乗家・学僧として名前の残る人である。また、宗統復古運動に直接関わった損翁は、室内の儀軌や口訣についても当然詳しかったと考えるべきであるが、江戸時代当時の室内学形成や伝承については、今後も更に研究することを付言して、本論を終える。

註

(1) 河村孝道『正法眼蔵の成立史的研究』附編「第二章『正法眼蔵却退一字参』考」に収録される「瞎道本光行状・著述略譜」を参照した(同著、七四七〜七五二頁)。

(2) 本論では、『伝法室内式』における作法の比較を行う。なお、当該作法書については、現状、曹洞宗宗務庁で定めたものを使用することが『曹洞宗宗制』『曹洞宗僧侶教師分限規程』にある。また、伝法作法を行わず時は、宗務庁教学部学事課に願ひ出て、作法書を下してもらう必要がある。本来は当該作法書を見るべきであるが、伝法を終えた曹洞宗侶以外にはまず目に触れることが無いため、資料として、石川力山『禅宗相伝資料の研究(下巻)』(六一九〜六二〇頁)に収録されている「伝法室内之式」が、ほぼ同内容であるため挙げておく。

- (3) 本書、一丁裏
- (4) 本書、三丁表
- (5) 『全集』二五七頁
- (6) 『曹全』『室中』一二三頁上
- (7) ともに本書、三丁裏
- (8) 本書、三丁裏
- (9) 本書、三丁裏
- (10) 本書、九丁裏
- (11) 『日域曹洞室内嫡嫡秘傳密法切紙』『丑之部』、『曹全』「拾遺」四九七頁。石川力山『禅宗相伝資料の研究(下)』の五三二〜五四三頁には『空塵書』に関連する数本の「切紙」を収録。

- (12) 本書、五丁裏
- (13) 本書、六丁表
- (14) 本書、七丁裏
- (15) 本書、七丁裏
- (16) 本書、六丁裏〜七丁表
- (17) 「合血」については、「いまわが洞山門下に、嗣書をかけるは、臨濟等にかけるには、ことなり。仏祖の衣裡にかかれるを、青原高祖したしく曹溪の几前にして、手の指より浄血をいだしてかき、正伝せられけるなり。この手の指血に、曹溪の指血を合して書伝せられける、と相伝せり。初祖・二祖のところにも、合血の儀おこなはれける、と相伝す」(『正法

眼蔵』〔嗣書〕卷、『全集一』四三二頁）とあることが知られている。なお、瞎道は「合血」を「血脈（正法眼蔵の異名）」が通じたことだとし、重視することについては、拙論「瞎道本光『大智燭頌関東辯矣』の研究」（『禪研究所紀要』第四四号、二〇一六年）でも論じたため、参照されたい。

- (18) 本書、七丁裏
- (19) 本書、七丁裏
- (20) 本書、七丁裏
- (21) 本書、七丁裏
- (22) 本書、八丁表
- (23) 本書、一〇丁裏
- (24) 『大事図』の各円相への解釈は本書一二丁表参照。
- (25) 本書、一一丁裏
- (26) 本書、一一丁裏〜一二丁表
- (27) 本書、一二丁表
- (28) 本書、一二丁表
- (29) 本書、一三丁表
- (30) 『曹全』〔室中〕一四四頁下段
- (31) 『曹全』〔語録三〕八二八頁上段。なお、面山は自ら拝覽した道元『嗣書』について、『永福面山和尚逸録』卷三に収録される「永祖高祖嗣書贊併引」（『統曹全』〔語録二〕五九三〜五九四頁）において、『法脈贊』とともに詳しく記す。
- (32) 『曹全』〔室中〕一八八頁上〜下段

瞎道本光『室内聯灯秘訣』の研究（菅原）

- (33) 本書、一三丁裏
- (34) 本書、一八丁表〜裏
- (35) 『曹全』〔室中〕一八一頁上〜下段
- (36) 本書、一八丁裏
- (37) 『日域曹洞室内嫡嫡秘傳密法切紙』〔西之部〕、『曹全』〔拾遺〕一五四頁

- (38) 本書、一九丁表
- (39) 本書、一九丁表
- (40) 本書、二〇丁表
- (41) 本書、二〇丁表
- (42) 本書、二二丁表
- (43) 本書、二二丁裏
- (44) 宗学復古の意義については、拙論「江戸時代初期の『正法眼蔵』研究について」（『禪学研究』第九三号、二〇一五年）参照。

参考資料

『室内聯灯秘訣』は愛知学院大学図書館所蔵・同禅研究所配架（請求番号1888/2854）の江戸中期写本を参照している。なお、付されている返り点に準じて読み下し、漢字やカナは一部を除いて底本に従った。

『曹洞宗全書』『統曹洞宗全書』（ともに曹洞宗宗務庁）なお、

瞎道本光『室内聯灯秘訣』の研究（菅原）

引用時には『曹全』『続曹全』一〇〇一〇〇頁〇段とし、巻号と頁数のみで略記している。

永平道元の著作は春秋社『道元禅師全集』（全七巻）から引用。なお、引用時には『全集』〇〇頁とし、巻号と頁数のみで略記している。

『永平正法眼蔵菟書大成』（大修館書店）を参照した。なお、本論にて参照した瞎道『正法眼蔵却退一字参』は一八巻に収録される。

河村孝道『正法眼蔵の成立史的研究』春秋社・一九八七年
石川力山『禅宗相伝資料の研究（上下巻）』法蔵館・二〇〇一年

永平寺史料全書編纂委員会編『永平寺史料全書（禅籍篇1）』
吉川弘文館・二〇〇四年